

協同の系譜

③

第1部 川崎 平右衛門

新田再興

自分たちの村つくる

川崎平右衛門は元文4(1743)年に南北武蔵野新田世話役に取り立てられ、寛保3(1743)年に支配勘定格に昇進、寛延2(1749)年7月に美濃本田陣屋に支配替えになるまでの約10年間、新田開発に取り組み、これを見事に成功させている。

8代将軍徳川吉宗による享保の改革は、年貢の増徴による幕府財政の改善を最大の狙いとした。その柱の一つとなる武蔵野新田開発は享保7(1722)年7月、江戸日本橋のたもとに新田開発の高札が掲げられて開始された。武蔵野の土地は関東ローム層と呼ばれる腐植に富んだ真っ黒な黒ボク土に覆われている。リン酸欠乏を起しやすくて、大量の肥料を注ぎ込んでやらなければ満足な生産は期待できない。白羽の矢を立てたのが川崎平右衛門であった。侍で

農民は新田を開き、3年間は幕府から生活資金と農具代が支給されるが、十分な収量を上げることができず、年貢を払うことがかなわず、逃げ出す農民が多発した。

年貢の増徴を果たせないうめ、幕府はたびたび担当の役人を交代させて局面の打開を図ろうとしてきた。しかしながら、こうした流れを転換させることができず、白羽の矢を立てたのが川崎平右衛門であった。侍で

農的社会デザイン研究所代表 葛谷 栄一

はなく百姓の出身で名士の平右衛門は、経済効率より、村人が自分の村をつくるという実感を

持ち、一緒に働くことで、お互いの心が結ばれ、助け合っていく風土づくりを重視した。

井戸掘りなどの公共事業も、江戸の商人に請け負わせるのではなく、村人が力を合わせて工事するようにし、工事費を節約して村財政の負担を軽減するとともに、工事の賃金は穀物により支給した。

また、この地では肥料投入が不可欠であることから、高値での金肥購入を避け、相場が下がる農閑期に半値で仕入れておいてこれを貸し渡し、収穫物を2割高で買い取って返済させた。このため肥料購入資金は幕府から1500両を無利子で借り入れ、これを年1割の利率で商人に貸し出し、その利息1500両を充当した。

経営可能な基盤確立

さらには、未開墾地や耕作放棄地を減らすには逃げ出した農民を呼び戻すことが必要であり、立ち帰り料として3両を支給して、たくさんの農民の呼び戻しを実現。飢饉(ききん)に備えて稗蔵(ひえくら)を作り、毎年の収穫の10分の1を備蓄。3年してはいっぱいになった稗蔵は、毎年入れ替わりに3年経過した稗蔵を江戸で売却し、その売却代金は村の催しや病人の手当などに使うための共有資金とした。

まずは農業経営が可能な基盤づくりに注力し、年貢を払うだけでなく、そのメリットを農民も享受できるようにして新田開発を成功に導いた。

小金井桜は国の名勝に指定されており、全国に知られる。玉川上水の両岸にあった松並木が老朽化してきたことから桜並木にするのを平右衛門が計画したもので、大和の吉野山と常陸桜川の苗種を選んで植えた。これも平右衛門の遺産の一つなのである。(次回は27日付)



川崎平右衛門没後250年記念にかけられた「平右衛門橋」からの名勝小金井桜

(東京都小金井市で)

協同の系譜 ④

第1部 川崎 平右衛門

武蔵野の原風景

緑農一体の開発が源

武蔵野新田開発は享保の改革の柱として享保7(1722)年に開始され、川崎平右衛門の登場によって成功させながらも、開発完了まで足かけ28年を要した。

そもそも武蔵野国とは、西北は入間川、東北と東は荒川、西南は多摩川によって囲まれた地域を指し、狭山丘陵を境に北武蔵野と南武蔵野に分かれる。今の東京都と埼玉県の半分を含むが、武蔵野といえは雑木林、緑豊かな地域を思い浮かべる人が多いだろう。

草地から畑地に転換

国木田独歩の『武蔵野』の影響によるところが大きい。実は武蔵野は茫々(ぼうぼう)としたススキやカヤなどが茂った

草地だったところだ。新田開発によって草地から雑木林もある畑地へと転換してきた。潜在植生(人為を加えなければ成立するはずの最終的な植生)は照葉樹林で、定期的に火入れが行われることによって、草原となり黒ボク土が形成されてきたと考えられている。これを農地化することによって緑を増やしてきたのである。

武蔵野新田開発の歴史は中世までさかのぼり、鎌倉時代に時の幕府の命によって新田開発がしきりに行われたとされる。江戸時代に入り本格的な新田開発に乗り出したのは、川越藩主の松平伊豆守信綱であった。秀忠、家光、家綱と三代の将軍に仕えた「知恵伊豆」ともいわれた信綱は、難航する玉川上水の通水を支援する見返りに、玉川

上水から分水しての野火止用水の開削を認めさせた。これにより、北武蔵野の未墾地を開発して小農を自立させて新本百姓とし、年貢を徴収して藩財政を確

立しようとした。明暦2(1656)年には開発確認のための検地が実施されている。それまで草地の多くは堆肥原料やまぐさを調達する入会地として利用されてきたが、以来、開発農民と旧住民との争いが頻発するようになった。

このように、武蔵野の新田開発は北武蔵野から進められてきた。享保の改革では、北武蔵野は鶴ヶ島に陣屋が置かれて残された未墾地が開発され、南武蔵野は小金井に陣屋が置かれて、今の中央線や西武新宿線・池袋線周辺をはじめ大々的な開発が進められた。今ではこれら沿線は住宅や商業施設が多くを占め、雑木林や農地の減少が進行しているとはいえ、都市農業は盛んで直売所や体験農園なども多い。



三富新田では今でも雑木林の落ち葉を利用して堆肥が作られている(埼玉県所沢市で)

戸が畑地の約2分の1に相当する面積の平地林を所有すること義務付けた。植えた雑木の落ち葉を堆肥として使用させ、入会地なしでの農業経営を可能にした。連綿と続く雑木林に一変

農的社会的デザイン研究所代表 葛谷 栄一

(次回は7月4日付)